



真室川 神様の ごっつお

～ハレの日 もてなしの形さがし～

-
- | | | |
|-----|---------|------------------|
| P 2 | はじめに | |
| P 3 | 6月食べ事会 | ～大沢・小国編～ |
| P10 | 10月食べ事会 | ～釜淵・お日待～ |
| P12 | 3月食べ事会 | ～平岡・節句の頃～ |
| P18 | 付 録 | 真室川「食べ物ごよみ」 |
| P20 | おわりに | 真室川の「神様のごっつお」に想う |

はじめに

食文化を見つめなおす「食べ事会」

真室川の家庭で培われてきた食文化・それを地域の財産として発展させていきたい。そうした思いから昨年始まったのが、真室川の食文化について、みんなで学ぶ「食べ事会」でした。

どの地域にも食文化があります。その土地の気候風土に育まれた食材を中心にして、伝統食・行事食は形づくられてきました。

そしてその地にあるものを上手に工夫し、食卓をより豊かなものにする技や知恵がありました。その技や知恵の担い手は、家庭の台所を預かる女性たち。「食べ事会」はそうした女性たちが中心です。

昨年は、伝統食・行事食をテーマとして、4回行われました。さなぶりの頃、お盆、刈り上げ、年越し。季節ごとの主な行事を取り上げ、それにまつわる風習や思い出、食事について話し合ってきました。

田植えの思い出、どじょうたたき、収穫への感謝、長い冬に備える知恵、神様を大切にする心などなど様々な話が出てきました。



ハレの日のごちそうは神様とともに

今年 18 年度のテーマは「真室川の神様とごっつお」。真室川ではごちそうのことを「ごっつお」と言います。真室川には今でもたくさんの神様が祀られていて、集落の神社はもちろん、その他にも、小さな祠があちらこちらにあります。そして神様のために、ごちそうを作ったり、お菓子をお供えしたりしています。行事食の多くは、神様とともにあります。神様を大切にする心と食文化。どちらも真室川では健在でした。

町内 3 地域で開催した「食べ事会」に登場した「神様」と「神様のごっつお」を紹介していきます。

6月食べ事会

～大沢・小国編～

小国公民館・参加者40名
2006.6.26 / 9:30～



小国のお大日様

義経の伝説を語り継ぐ

大沢小国の佐藤家に祀られているお大日様。この家では神棚を祀っておらず、その代わりがこのお大日様である。正式には、大日尊と呼び、そのご神体ともいえる一幅の掛け軸にまつわる、こんな言い伝えが佐藤家に代々語り継がれている。

800年ほど前のことである。山伏の一行がこの家に立ち寄り、一夜の宿を借りた。その時、佐藤家には特別にもてなすものが何もなく、大根と蕪をごちそうしただけだった。



翌朝、そのお礼として一行は、一幅の掛け軸を置いていったという。後々になって考えると、山伏の一行は奥州へ落ちのびていく義経主従一行だった。その掛け軸が現在のご神体となっている。

当時の、この家のおばあさんは目が見えなかったが、この神様を拝めば目が良くなると言われ、そのおりに一生懸命に拝んでいたら、目が少し見えるようになったという。

ほんの一息の間だけの御開帳

佐藤家では、毎年（旧暦の）10月15日（新暦では今年12月5日）に、1年に1度だけ御開帳をする伝承を守ってきた。その日の正午ちょうどに、当主が一息の間だけ、掛け軸を見せる。その一瞬、掛け軸に描かれたものが見る人によって様々な形に見え、見えたものが、その人の1年の運勢を表すという。それがよく当たるので近隣では「あらたな神様」であると大変有名になった。また、あまりによく当たるので、怖くなって来なくなった人もいたという。身内に不幸があった場合は、御開帳には遠慮してもらうことにしている。

祭壇には、お供えとして、メス鮭を入れた鮭箱（現在の箱は昭和5年に新調）と、5つの三方に秋の果物（栗、柿など、なるべく自分の家で採れたもの）、餅（3～4升ほど搗く）、お神酒をのせたものが供えら

れる。

また、この日にしか使わないという大鍋に鮭のヒレと里芋を煮て味噌仕立て（「お煮物」という）



にし、軸の開帳と同時にふたを取って湯気をたてる。その湯気のせいで軸に描かれたものが、いろいろな形に見えるのだともいわれている。鮭は、現在でも砂子沢まで上ってくるが、昔は、正月にしか食べられない大変貴重なものであった。「お煮物」は、祭礼の後、家人や親戚で食し、参詣者には、きのこの味噌汁やおひたしなどが振舞われる。

「あらたな神様」・・・「霊験あらたかな」という意と思われる。

かつては行列ができた御開帳日

御開帳日には現在でも、近隣はもとより、平田町をはじめとする庄内方面や、秋田、山形方面からも参詣に訪れるという。御開帳の日にお参りに来る人は、現在は30～40名ほどであるが、昔は多くの人が出て、砂子沢まで人の列が続いたという。50年以上前、特に、第二次世界大戦の時には多かったという。多い時で3,000人もの人々が訪れたこともあった。庄内から来る人が多く、近隣の民家に宿泊する人もいた。鮭漁をする人だけではなく、いろいろな人が集まってくる。

佐藤家に限らず、小国の集落の家々はどこの家でもごっつおを用意していて、訪ねてくる人に振舞っていた。普通の家でも、親戚の人、知り合いを含めて80名くらいの人々が訪れた。魚は焼鱈やきがれいで、胡桃餅くるみも作った。今年は何のぐらいの人が来るものかと、算段しながら数十人分を作って待っていたという。今でも7～8人分は、餅を搗いたり、お茶菓子を準備して待っているのだという。

着物破れ、気絶する者も

御開帳の当日は、より多くの人の中に入れるよう全ての襖が取り払われる。それでも、数千人も



の参詣者全員が中に入ることは不可能で、庭から外まで大勢の人が溢れた。集落の若い衆には、みんながお堂に入れるように押し込む役目が与えられ、裸になって大汗になりながら、人々を移動させたという。遅れてきた人は、台所の流しからも入っていった。

そんな状況であるから、中には着物の袖が破れてしまったり、気絶してしまう人もいたらしい。お賽銭はというと、今で言うロープウェイのように張られた縄に籠を通し、その籠に入れるようになっていた。下にお賽銭が落ちていたので、人がまばらになったところに落ちた賽銭を拾ったりする人もいたという。

お大日様の御開帳日が隆盛を極めていた頃、学校も早上がりで休みになったという。

かぶ 蕪と大根を絶ち、しょうじん 精進

佐藤家では御開帳に先駆け、(旧暦の)10月10日から大根と蕪を絶ち、精進して御開帳の日を迎える。祭壇に供えた大鍋の「お煮物」は、御開帳当夜、親戚や家族で食べるが、それが残っているうちは、その後も、大根絶ち、蕪絶ちをやめることができないというしきたりになっている。御開帳当日は、参詣者も大根絶ち、蕪絶ち、精進をしてこなければならない。

また、佐藤家については、先代まで一年中精進が行なわれていたという。そのため、この家から他所に嫁に行った人は、初めて食べた大根にんにくの美味しさに驚いたそうだ。しかし、今の代になって、子供がみんなと同じものが食べられず、かわいそうということもあり、毎月旧暦の15日だけ、精進をすることになった。その日は、義経主従にふるまったという蕪と大根も食べないことにしている。義経一行に、大根・蕪しか振舞わなかったため、それを悔いて、以降食べない慣わしになったとされる。貴人と同じ食べ物を食べるのは畏れ多いという気持ちがあったからかもしれない。

精進・・・二足・四足の動物、にら、大根、玉葱などの香りの強いものを絶つこと。

しょうじん 精進おとしの「よう汁」

御開帳が終わり、17日になると、小国集落の名家、分家の親戚の旦那方を呼んで、大根・蕪の精進おとしが行なわれる。その時にはよう汁とお膳のごつつおが振舞われる。



お大日様の御開帳は、鮭漁をする人には、特別な儀式とされ、庄内地方や鮭川村の人により、たくさんの鮭が供えられた。その鮭を下ろして、「よう汁」にして食べる。よう汁は、鮭と蕪、大根を具に、味噌仕立てにする。この精進おとしが終わってはじめて、蕪と大根を食べることができる。

よう・・・イオ(うお=魚)が訛ったもので、一般には鮭をさした。

お大日様にまつわる話

お大日様には、鐘の緒も多数奉納されている。時期を問わず、願い事がかなうとお礼参りにやってくる人々が奉納していくのだという。また、珍しい鮭の絵馬なども奉納されている。

最近になってこんな不思議な話がある。昭和55



年にご神体ともいえる掛け軸が盗まれたことがあった。しかし、7年後の昭和62年には、郵便で戻ってきたのだ。いまだに犯人は不明だが、佐藤家では盗まれたことよりも戻ってきたことに驚いているという。



小国の神様とごっつお

女達の「おぶつな参り」 【小国】

小国集落内には、お大日様、庚申様2体、稻荷様2体、山神様4体(うち屋敷にあるのは1つ)、太平山様、地蔵様、白山様、雷様、八幡様、神明様など16体の祠が祀られている。この村全部の神様を、年に1度、5月の第2日曜日に女性たちが参拝して回るのが「おぶつな参り」だ。

かつては、上の組、中の組、下の組などの組があって、当番の人は神様を、自分の家に泊めさせる。また、婦人会で「くちうけ」を頼んで、年に1回、16全部の神様を降ろしてきて、集落の人の1年を占ってもらっていた。以前に、山神様が里に下りている時期におぶつな参りをしたことがあった。その時、山神様を降ろすと「ちゃんと三本杉まで来て山神様をお参りするよう」に言われたという。昔は、大平に「くちうけ」をする人がいたが、今はいない。

「くちうけ」・・・神降ろしをする人

16の神様が言ったことは、書記が記録していた。「何歳の方は山に行つて注意すること」「遠くに行つたら怪我に気をつけること」などが託宣される。その託宣に該当した人には婦人会などがその

旨を伝え、言われた通りに皆で託宣を守った。また、そうした人の家の軒先には笹を挿して「魔よけ」にしたという。

おぶつな参りは、各家からお賽銭、お神酒、お灯明、お菓子を持って(お灯明とお菓子は婦人会で準備する)午前8時に集合し、村の下の方から順番どおりに回っていく。昔は、お菓子のかわりに「あられこ」や、あずきご飯を作って供えたという。そのほか、芋を煮たり、うどや凍み大根、にしん、しいたけ等の煮しめを作って重箱に入れ、神々に供えてお祈りして回る。お神酒は盃に入れて供え、お灯明もともす。山のてっぺんの三本杉に行つたときは、お神酒も頂いてくる。

昔は徒歩だったので、村を見渡すような高い場所にある三本杉の山神様に行くだけでも、2時間程かかり、全部を回するには半日もかかったそうだが、今は、車を使つているので、全部を回つても2時間ほどしかかからなくなったという。この日に参加できなかった人は、参加者にお賽銭を預けて回つてもらふことになる。

神々に供えたものは、そのまま持ち帰つて皆でいただくことになるが、お菓子だけは3つくらいずつ供えたままにしてくるという。持ち帰つた供物やお菓子はお護符として各家に持ち帰り、「粗末せずにいただけ。粗末すれば罰かぶるぞ」といって、大切に食べられた。



地蔵様には、おぶつな参りが全部終わった後にお参りし、その後「宿」でそれぞれが持ち寄つた

ごっつおを食べた。現在は、公民館が「宿」になり、弁当をとって会食しているという。ごっつおは、身内に不幸があってお参りに行けない人が留守番をしながら作って待っている。身内に忌み事があった人は、地蔵様だけにお参りするのだという。

おぶつな・・・うぶすな（産土）が長年の口承の末、訛ったものではないかと思われる。産土神とは、自分の出生地を護る神のこと。その土地で誕生した人を、一生を終えるまで守護し続けてくれる存在と言われる。

子ども達の山の神勸進 やま かみかんじん 【小国】

山神様は旧の3月節句（今の4月3日）に行なわれる。三本杉の山神様のお宮は、昔、子ども達8人くらいでようやく囲えるほどの大きな杉の木が3本あったが台風で倒木した。節句の時期はまだ雪の中であるが、木を目印にして、ちゃんとどこにお宮があるか分かっていて、雪を掘り起こしてご神体を持ってくる。

そうして集落まで下ろしてきたご神体を、子どもたち（男の子）が抱きかかえながら「えーと、えーと」と囁しながら、村中の一軒、一軒を回って歩く。

ご神体は木でできた小さいものだが、まさかりを持った立派なもので、子ども達が抱いて回る時には、顔に真綿を伸ばしたものをかぶせる。歩き疲れ、お腹が空いた山神様をねぎらい、米粉を皿に溶かして、山神様の口に少しずつ塗る。また、くじら餅、いがら饅頭などを食べさせる時もある。

また、山神様の「花遊び」といって、神様を堰の水に入れたりして、子ども達と一緒に遊んだこともあったという。

当番の「宿」では、ご馳走をつくり、子ども達に振る舞う。子ども達は、もらったお菓子や、賽銭を皆でわけて喜んで帰る。昔は、10数人の子供がいて、下と上と二つの組に分かれて勸進を行なった。また、子供たちが多かったので、1家族1人ずつしか出られなかった。今年は4人だったが、来年は、もう1人になってしまうという。

男達の「お日待」 ひまち 【小国】

お日待は、旦那達のお祭りである。神主さんを頼んで山神様（下と上の2つ）、白山様3箇所だけにお参りする。昔は、11月3日と決まっていたが、今は11月の第1日曜日に行なわれているという。

それぞれの神の「別当」がお供え、お神酒、米や、縋った注連縄、櫛を準備して持つ。秋なので、栗、りんごなどの山のもの、畑のもの、海のもの（お頭つきの魚）をお供えに使う。秋の収穫の御礼でもあるという。お参りの時は、背広などで正装して集まる。神主がお祈りして、御幣をきる。

女性たちは、下と上に分かれて、ご馳走を作り。参加の旦那達に振舞う。直会のごっつおは芋の子汁などが多い。お参りが終わった後なので、二足、四足でも大丈夫である。ただし年中精進しなくてはならないお大日様の旦那（佐藤家当主）には、別の食物が準備されていた。神主にもご馳走して、送り迎えをする。各家へのおみやげは特になく、お護符のようなものもない。

まだまだある小国の神様

小国集落はかつて50軒あったが、今は24、25軒くらいに減っている。集落の中には、いくつもの祠が祀られており、子ども、女衆、男衆もそれぞれ神様と関わっており、「これは必ずしなければならぬ」ということが伝わっていて、若い人達も今なお続けられている。

この他、「雷様」は旧3月3日、「神明様」は8月1日、「八幡様」は8月14日、「稻荷様」は旧2月初午が祭礼の日となっている。

稻荷様は屋敷の中にお宮をつくって祀っており、砂子沢の本家の姉嬢が伊勢参りをした時に分けてもらってきたものだそうで、ご神体は真っ白い狐の姿をしている。油あげ、ご飯、お神酒をお供えする。屋敷に対してお宮の位置は、ほぼ後ろ右脇になっている。

昔は、隣の集落の砂子沢から稻荷様を信仰している人が訪れ、重箱で持ち寄ったご馳走を家の中

で食べた（2月なので、外の会食は無理であるため）。今は、家族2、3人くらいでお祭りをして
いる。たきぶかし（おふかし）煮しめ、寒天を
お稲荷様に供えて、下げてきたものを皆で食べる。

雷様は、昔からあるが、その由来はあまり聞いて
いない（お宮の中に、神様の由来が書いている
はずである）。八幡様は、兵隊に行くときに武運
長久を祈っていた。

雷様、神明様も、特に何を供えるかというこ
とは決まっていないので、あるものをあげながら、
家の人だけでお参りする。

矢の沢の産神様

こごたやまじんじゃ かんじょう 小牛田山神社から勸請

矢の沢の産神様は、お産の神様である。ご神体
は掛け軸で、昔は小牛田山神社（宮城県）にお参
りしていたが、遠いので、地区の名主であった佐
藤仁兵衛氏が、神様を勸請かんじょうして氏神にしたものを、
地区の神様にしようとお願ひしたのでという。隣
の地区からも寄付をもらって、昭和12年9月に
お宮を建立、現在は地区の神様として祀っている。

昔は、小牛田まで行ってお参りをし、温泉など
でゆっくりしてきたが、今は、自分達の神様とし
て地元で皆で楽しんで参詣している。昭和12年
から数えて、来年には70周年を迎える。地区の
高台の林の中にお宮がある。



女達の豪勢な宴会

お産の神様なので、男の人はお参りしないこと
になっていたが、最近では、男もお参りするよ
うになっているという。ご縁日は、旧3月12日
であり、現在も旧でやっている。前日午後には集
落全戸でお宮の掃除をする。その頃は、まだ雪
が残っている時期であり、今年は特に雪が多か
ったので、雪の中をお参りした。かつて集落
には20軒あったが、今は18軒。現在も、1軒
に1人は、必ずお参りしている。お宮が整備
され、町の広報に掲載されたこともあり、他所
からも参拝に訪れるようになってきている。こ
の日は、お賽銭、塩、米とお灯明、お神酒を
供える。集落の各家18軒が持ち寄ったお神
酒、煮しめとおふかしなどのごっつおを、他
所から来てくれた人にもふるまう。昔は、当
番の家に集まって、夜まで女達で祝いあい、
とても豪勢な宴会になったという。



女性だけの会なので遠慮なく、小皿に取り分
けながら食べて、呑んだ。そして残ったごっつ
おは、再び集められて「下戸祝」としてもう一
度2次会を行なうのだという。下戸祝をする
前には、男衆に頼んで「旗おろし」を行い、
その御礼として重箱のごっつおを残してお
いたものと、お神酒を男衆にもふるまった。

女性はその日一日は何もせずに、気がねな
く、おおっぴらに飲んで、ゆっくり楽しんだ。
昔は、

今ほど楽しみがなかったの、その日がとても待ち遠しかったという。特にごっつおは自分たちが楽しむために、一生懸命に作った。昔は煮しめが多かったが、今は、若い人なりのいろいろな自慢料理が出される。

お 鐘の緒のいわれ

お参りしたときに、「鐘の緒」(紐)が落ちてくると子供が授かるといういわれがあって、緒が落ちると集まった人達が喜んで拍手した。

赤い緒が落ちた時は女の子、青い緒は男の子が授かるということである。落ちてきた緒は家に持ち帰る。

お礼参りするときは、自分の子供の名前を書い



て、新しい鐘の緒を供える。子供がもっと欲しい人は、緒の先を縫わないでおくのだという。昔は、お嫁さんが来れば、早く子供が授かるようにとお参りをしたという。

6軒が交替で宿に

虚空蔵様(福一万神社)は、9月13日が祭日となっている。川舟沢の一番はずれにあり、集落みんなの神様として祀ってきて、300年以上の歴史があるという。丑と寅年生まれの人の子守本尊になる。川舟沢集落は、昔は12軒あったが、今は6軒に減った。

祭日には、大根2本、するめ、米、塩などをお



膳に供えて、神主さんに拝んでもらう。

お神酒、お賽銭、重箱のごっつお、お灯明等を皆で持ち寄って祭壇にお供えし、お祓いをしてもらう。重箱には、赤飯、煮しめが詰められる。午前11時頃から1時間ほど拝み、その後、持っていったごっつおをお宮の中で食べる。そして、「宿」の家に行って、準備されたお膳で祝い、その日は1日、楽しく食べ、呑んで過ごす。

去年の献立は、魚、肉、ほたての吸い物、赤飯、酢の物、炒りもの2品、おひたし等であった。お膳は、各家が保有しており、懐石膳風にいろいろなご馳走を用意する。宿は、6軒の家が交替で受け持つことになっており、虚空蔵様、お日待(部落の祭り、11月の第1日曜日)、ばあちゃんたちの地蔵祭り(3月24日)の3回を交替で行なう。

ばあちゃんたちの地蔵祭りは、今は座卓でやるが、昔は全部お膳で振舞っていた。

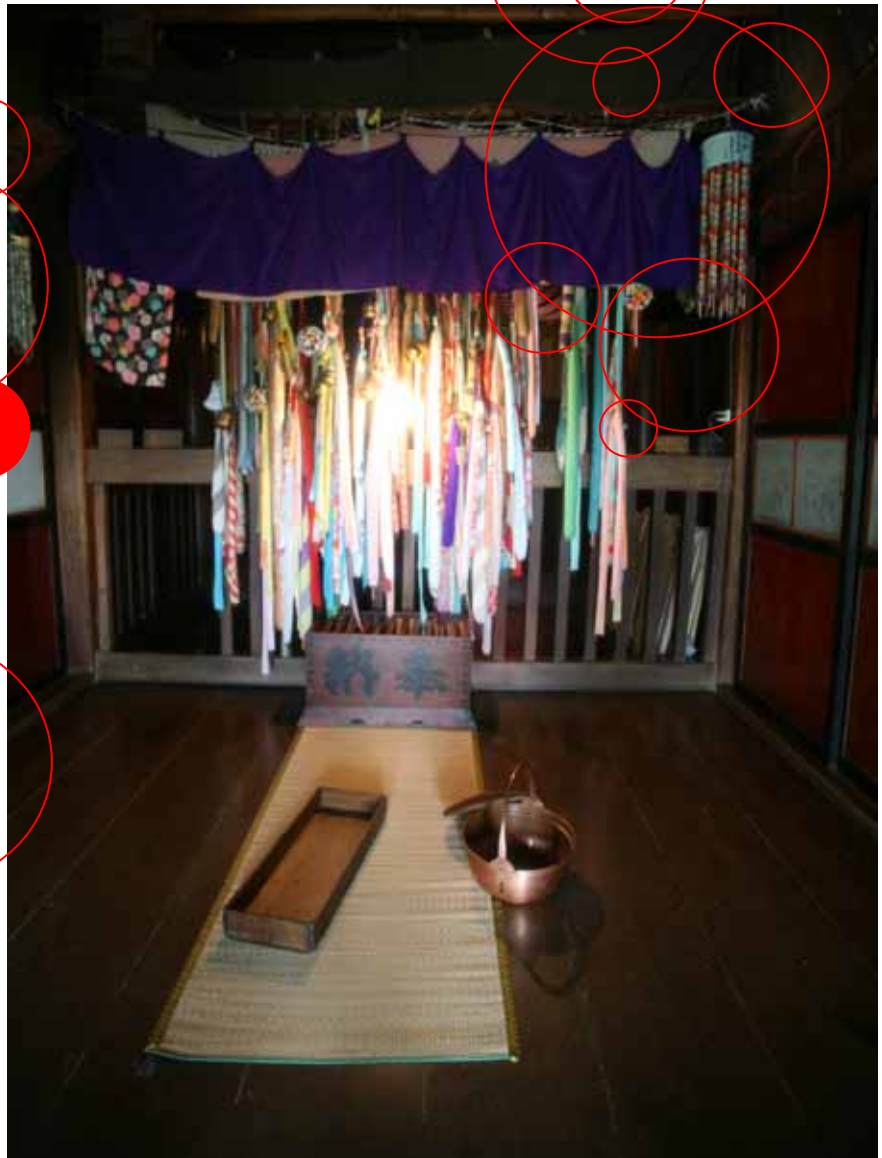
子供が入学するときに、交通安全、家内安全祈願の千羽鶴、鐘の緒をつくって自分で結んで奉納し、願いがかなうとお礼参りをしたという。

今回のごっつお

小国をはじめとする大沢地区の神様のご馳走を中心として、季節の料理も含め、会場となった小国公民館には、たくさんの料理が並べられた。

様々な話を聞きながら、食べ事会のメンバーで、ごっつおを楽しんだ。以下は、当日、並べられた料理のメニューである。

・煮物（ニシン、凍み豆腐、青漬けウド、昆布、舞茸、サヤエンドウ）・ゼンマイ炒り・ゼンマイの胡桃あえ・山菜と胡瓜の味噌あえ・キクラゲ炒り・漬物炒り・ミズのサラダ（ツナ、玉ネギ、ミニトマト）・ナルコユリとワラビのおひたし・大根と大根葉の浅漬け・しなびキュウリ・赤飯・しょうゆぶかし（舞茸、枝豆）・笹巻き・あられこ・カボチャの茶巾絞り など



10月食べ事会

～釜淵・お日待～

釜淵1公民館・参加者40名
2006.10.2 / 10:00～



釜淵の神様

釜淵集落には、神様を祀った祠、社が十数か所ある。虚空蔵様、女人禁制の権現様、山の神、地藏様、稲荷様、鬼子母神様等々である。釜淵集落の栗田隆治氏、栗田政次氏を先達にして、地藏様、お稲荷様、虚空蔵様にお参りした。

地藏様 【釜淵】

地藏様は、姉崎家の氏神として、200年前から代々守られてきた。その昔は地藏様に金粉が塗られていたらしく、今の姿は何度か塗り直しをしたものである。お堂も昭和63年に建て替えられている。



個人の氏神ではあるが、子どもを守る神様として皆に大切にされており、今も、集落や近郷の人々が生まれた子どもの健康と成長を祈りにやってくる。

子どもが生まれると地藏様に「へその緒」を納め、三十三日のお宮参りを行なう。地藏様の前には、祈願のために名前を書いた「よだれかけ」がたくさん奉納されている。

祭日は9月24日で、毎月24日が地藏様の日とされている。その日は集落の人が回り番で、赤飯、お菓子などを供えてお祈りをしている。昔は、毎回お餅を搗いて供えていたという。地藏様へのお供えものは、「御護符」として持ち帰り、ありがたく頂戴する。

いなり お稲荷様 【釜淵】

井上家の屋敷左手奥にお稲荷様の祠がある。傍らの狐の像には明治41年と刻まれており、およそ100年も昔から守り続けていることが分かる。現在の井上欣一氏で三代目となる。井上家の先祖は、医術を施していた。昔の医療は荒療治であったので、「神頼み」も必要だったらしい。お稲荷様のご利益は、無病息災、五穀豊穰、家内安全である。

家の守り神であるとともに、集落の神様でもある。近隣の人とはもとより、新庄市、秋田方面、東京からも多くの方が参拝に来ていたという。しかし今は、少子化の影響なのか、お参りの人もだんだん減ってきているという。

お供えには、神の使いである狐の大好物、油揚げは欠かせない。毎月のご縁日である15日にも

油揚げと季節の食べ物を供える。縁日には、今でも、当主の井上さんがきちんと装束を整え、祝詞をあげている。

お稲荷様の祭日は、旧暦の9月15日（今年は10月12日）に行なわれる。悪魔祓いとして番楽が奉納され、集落からご馳走が集まる。また、各家でも、ご馳走やお初穂（寸志）を準備して番楽が回ってくるのを待つ。



お日待ちと^{こくそう}虚空蔵様の祭り 【釜淵】

虚空蔵様は、集落を見渡す小高い場所に祀られている。8月20日に、この虚空蔵様のお堂を会場に、「お日待ち」という行事が行なわれる。「お日待ち」とは、稲などの作物に台風などの被害が出ないように祈願する行事である。「^{かぜひま}風日待ち」とも言う。二百十日（9月1日）前後に行うことが多い。

この日は、農作業などの仕事は一切休んで、虚空蔵様のお堂に村人が集まり、飲食をしてお祭りをする。法印様にお祓いをしてもらい、祈祷する。各家から重箱に詰めたさまざまなご馳走が持ち寄られて、宴会となり、残ったものは、御護符として持ち帰る。昔は、夜まで集落の家々をまわって歩くこともあった。今は、町外に働きに出ている人が多いので、朝6時に始まり8時頃までには終わる。たいていは世帯主の男衆が参加する。かつて40人以上は集まったものだったが、今年の参加者は平日だったこともあり10人だけだった。この日のごっつおは、茄子炒り、ささげ炒り、



ぜんまい炒り、ごぼう炒りなどの季節野菜の料理と、赤飯やまぜご飯だった。昔は、蒸かしたり、焼いたなすがよく出た。基本的には精進料理だが、今はそこに魚なども加えているという。

毎年9月13日には、虚空蔵神社のお祭りが行なわれる。虚空蔵様や、さらに山道を登った場所にある「風呂輪神社」に番楽の獅子舞が奉納され、その後、悪魔祓いとして集落の家々を回る「門獅子」が行われる。

今回のごっつお

釜淵の祭りのご馳走をテーマにして、虚空蔵様のお堂の中にたくさんの料理が並べられた。食べ事会のメンバーで、お祭りのごっつおを楽しんだ。以下は、当日、並べられた料理のメニューである。

- ・ナス焼き・マスダケの煮物(糸コン等)・煮しめ・タケノコの煮物・間引きカブの煮物(油揚げ、麩、シメジ等)・ミズの煮物(油揚げ、マイタケ等)・車麩の煮物・ナメコおろし・春巻き(ひき肉入り、揚げ物)・古代米の赤飯・おこわ・しょうゆぶかし(タケノコ、油揚げ)・きなこ餅・漬物・果物・ムース・寒天・クルミのゆべし・スウィートポテト など



3月食べ事会

～平岡・節句の頃～

平岡下松沢邸・参加者30名
2007.3.12 / 10:00～



結城登美雄氏のお話 「3つの食」

「今年度は、『神様のごっつお』というテーマで、大沢、釜淵、そして今日の平岡と、町内各地域をそれぞれ回ってきました。この真室川には、神様がいっぱいいて、今も皆さんがそれらを大切にしながら暮らしていることがよく分かりました。

食べることには、3つの意味があります。1つは『生きるための食べ物』、それから『儀礼のための食べ物』、さらに『楽しみのための食べ物』です。

わたしたちの先祖も、生きるための食べものを一生懸命に苦労して確保してきました。生きるために、田や山、川の幸を探して食べ物にしてみました。真室川のさまざまな漬物も、冬の食料として保存するために工夫して生まれたものです。

儀礼のための食べ物とは、食を支え、与えてくれる神に対し、あるいは自然の力に対して、『おかげさまで食べることができます』と感謝の気持ちをこめて、捧げた、あるいは供えた食べ物のこ

とです。

そうして積み重ねてきた食に関する技は、食生活を豊かにして、食べる楽しみも創っています。日本の特に都市部では豊かになった分、グルメなど、楽しむためだけの食が表立ってきているように感じますが、ここ真室川には、『3つの食』が大切に守られている気がします。食べ物を得る知恵も、みんなで食べる楽しみも、神様をきちんと祀り、神様と一緒にごちそうを食べる儀礼も、食べ事の形として、今も各地域に残されています。それは、神様や自然に対する謙虚な気持ち、感謝の心を忘れずに守っているということだと、私は思っています。」

平岡の神様

平岡にも神様がたくさん祀られている。平岡の神様のスライドを見ながら、結城氏がコメントを加えた。

「風を防ぐため、山を背にしてその山裾に集落ができています。また、そこには必ず湧き水があった



はずである。川と湧き水のある水が豊富な場所を先祖が住まいとして選んだのだろう。杉林の小高い丘には熊野権現様が、また、山の上には山神様が祀られている。神様は、人間の暮らしの場よりも、上に祀られていた。」

ばとうかんのん
馬頭観音様

「馬の神様である。昔は、馬の力を借りて、田を耕し、山の仕事をしていた。馬は、人間の暮らしには欠かせない大切なものであった。その馬が死んだりすると、供養に馬頭観音様をお参りした。馬が交通や荷役の手段となっていたため、特に宿場町に馬頭観音が多い。」



地藏様

「村、集落の入り口に多く祀られていた。しかし、このごろはあまり大切にされず、寂しく形だけが残っている所が多い。真室川では、今も子どもが生まれるときちんとお参りして、前掛け（よだれかけ）を着せたり、お供えをしたりしている。生まれた子を慈しみ、すこやかな成長を願ったという親の愛情を、親子ともに地藏様参りをすることで、命の大切さと共に子どもに伝えてきたのではないだろうか。」

こうしん
庚申様

「杉の大木の下に祀られている。おそらく、集落ができた最も古い時代の神様であろう。目印になる木を植えているのは、皆でお参りしようという



思いがあったからだろう。その気持ちを受けとめる人がたくさんいて、永くつなげてきた地域には、豊かな精神文化があったといえる。鶴岡にもこうしん庚申様がたくさん祀られていて、土地のじいちゃん、ばあちゃんが、立ち止まってきちんと手を合わせている姿がある。」

やまのかみ
山神様

「春に、村の男の子たちが本尊を背負ったり、抱いたりして、集落の一軒一軒を回って歩く。それを見ると「そろそろ春だな」と、田植えの準備が始まる。各家では、お菓子やお賽銭を準備して、子ども達に配る。」



平岡の神様のいわれ

平岡の古老柿崎宥存氏(80歳)が、集落の神様のいわれについて説明した。平岡には、いろいろな神様がいる。先祖が、ありがたい神様を選んで本社から分祀、分霊して集落に持ってきて、祠を建てて祀ったものが多い。

くまのごんげん 熊野権現様

いつ祠が建立されたのかは不明だが、和歌山の熊野権現の本社から分祀したものである。記録によると、江戸時代の文化年間に改築したとある。

平岡を一望する小山の上であり、この小山は「大仏森」と呼ばれている。



家内安全の神様である。昔は、疱瘡が流行ったので、疱瘡を癒す神様でもあった。毎年7月14、15日に祭りが行われる。14日が宵祭り、15日が本祭りである。皆で参り、ごちそうを供え、神様から下ろしたお神酒や食べ物をいただくなおりい直会をした。

かすが 春日神社

奈良の春日神社から分霊して祀った神様である。建立は、文化年間頃である。家内安全、身体堅固の神様である。また、耳の神様でもある。耳が聞こえるようにと、川原で穴の開いた石を探して奉納した。今でもお宮には、奉納された「穴あき石」がたくさん残っている。9月6日がお祭りである。昔は、村芝居も行われたほど、にぎやかな祭りであった。



ばとうかんのん 馬頭観音様

これも、いつ建立されたのか不明である。交通安全、身体堅固、家内安全、さらに旅行の安全を守護する神様として祀られている。今からおよそ300年前の江戸時代にうまれたと伝えられている最上地方の地場の観音霊場、「新庄地巡り三十三観音」の22番目の札所になっており。ご詠歌には「ゆがみたる 心の道も 平岡の やすめば花の うてなとはなる」と詠われている。

いくつか種類がある観音様の中で、馬の神様とされている。農耕、運搬、乗物と何かにつけ馬の力に頼っていたので、農家の暮らしにはかけがえのないものであった。馬は大切な財産であり、昔は「かたしんしよ方身上」(財産の大切な片方の意味)とされていた。

馬頭観音にはいろいろな姿があって、三面四臂、四面八臂など様々あるが、平岡の観音様の姿はさんめんろくつひ三面六臂で、3つの顔と6本の腕がある。その顔は悪を滅ぼすにふさわしい、憤怒の表情をしている。このご神体は、60年に一度だけ、御開帳される。

祭日は、毎年8月19日に行われる。昔は旧暦

だったが、今は新暦で行なっている。ありがたい神様として、最上郡、新庄などの近郷からたくさんの方が訪れた。かつては農家の方が、布や鈴で飾りつけた馬を引っ張って、シャンシャンと音をたてて参ったものである。終戦後までは、芝居小屋や出店も並び、神様に奉納する若者による花相撲も行われ、とてもにぎやかな祭りであった。しかし、時代の流れで、田仕事もトラクターに替わり、馬を飼う家もほとんどなくなったため、参る人も少なくなってきた。それでも、地域では大切な村祭りとして子供神輿や子供花相撲など、時代に合わせながら続けている。今は、女性のグループで、観音巡礼で参詣する方が少しずつ増えているようである。

地蔵様

村の入り口にお祀りしている。神仏一体の流れで、仏教からきた神様である。仏教の 13 仏の 1 つになっている。地蔵様は、地獄の入り口にいて、人間を助けてくれる神様といわれている。子どもが生まれるとへその緒も奉納した。地蔵様は子供たちを守ってくれる神様である。

毎月 24 日が地蔵様のご縁日で、村の子ども達や親子でお参りする。おふかしや赤飯、巻寿司な



どを作って供えている。一緒に供えるお菓子は、お護符として持ち帰り、家族みんなでいただく。

隣接する金山町の入り口には地蔵様と同じく子供や安産の神様として子安観音がある。

やんまのがみ 山 神様

山の神様は、五穀豊穡の神様である。真室川などの集落でも祀られている。田んぼをつくっている時期は田の神様として作物を豊かに実らせ、収穫が終わると次の年の春まで山の神さまとして山を守っている。女の神様で「^{このほなさくやひめ}木花咲耶姫」だという説もある。平岡の山神様のご神体は、髪の長い女性の姿をしている。



2月に行われる「お日待ち」は、山の神が下ってきて田の神になる日を祝った行事である。

家に男の子が生まれると木で人形を作り、山の神様に奉納する。木は、みずきなどの縁起の良い木を使う。山の神様の祭りである「山の神勧進」は、今でも行われている。4月2日（かつては、旧の3月節句）に中学2年生（数えの15歳）を大将にして、地域の男の子達が早朝から全戸を訪れ、「やんま（山）のがんみ（神）のがんず（勧進）祝ってたもれば になが大将 にんぎりずんぞう（握り地蔵）めーだ（蒔いた）めだー（蒔いた）」と歌いながら、「にんぎりずんぞう」（奉納された木彫りの人形を荷縄で縛ったもの）を玄関から家の中に向かって転がして回る。



その唱え言葉も、回る日も、集落によって違うようだ。子ども達のその声を聞くと、長い冬が終わって「やっと春がきたなあ」と穏やかな気持ちになる。春の訪れを知らせる行事である。昔は山神社のお堂に泊まり、翌朝から人形を背負って回ったものであるが、今は火の用心のためか、公民館や集落の民家で行うか、当日の早朝に集まって行なうようだ。各家では、米や菓子、お金を準備して子ども達に配る。昔は米が多かったようだが、今はお金になっている。集まったものは、その年の大将の権限で分配される。こうした行事からも異年齢交流や人間関係の基礎が作られていたのだろう。

昔は子どもが多かったので、1軒で長男1人だけが山の神勧進に参加したものが、今は集落の子どもが少なく、兄弟で参加しても勧進で回る子どもの数は年々減ってきている。



こうしん 庚申様

各集落で、数軒毎の庚申講をつくり、「宿周り」(行事を順番に受け持つ)で60日に1回巡ってくる庚申の日にお参りする。平岡には、今でも2つの庚申講がある。庚申の日のごちそうを作り、

神様にお供えをして拝み、直会をする。

仏教では庚申の本尊を「青面金剛」及び「帝釈天」に、道教では「猿田彦命」としており、庚申の「申」の字が猿と結びつけられたと考えられている。平岡では、庚申の日になると青面金剛の掛け軸をかけ、これを本尊として拝んでいる。本尊の掛け軸は庚申講の宿を巡回する。庚申の日になると、前回の宿だった家の当主が今回の宿の家に掛け軸を持参してやってくる。そして、次の庚申の日まで、今回の宿の家で大切に保管される。

庚申の日には、一晩中起きている習わしがあった。人間の頭と腹と足には三戸とよばれる虫がいて、いつもその人の悪事を監視しているという。三戸は、庚申の夜、寝ている間に天に昇り、天帝に日頃の行いを報告し、罪状によっては寿命が縮められると言われていた。そこで、庚申の夜は三戸が天に昇れぬよう講を組んで夜通し酒盛りなどをしたとのこと。現在は、夜通し飲み明かすと言うようなことはない。

庚申様は、「ついで参り」(他の神様といっしょにお参りする)が禁じられている。大切な神様なので、きちんとお参りしなさいということだろう。また、平岡では、庚申様にさらに「お」を付けて、「お庚申様」と呼んでいる。

もっとある平岡の神様

平岡には、このほかにも秋田の太平山から分霊した、力の神様、健康の神様である太平山様や、五穀豊穡を願ったお稲荷様なども祀られている。

神様のお供えと祭りのごっつお

田の神迎え(山の神下り)のお供え

毎年2月16日、春に山の神は、山から下りて田の神になる。その年の豊穡な実りを祈って、お供えをする。大きな升の上に末広がりのわらぼちを載せ、その上にぼた餅を載せて供える。升には「ますます豊かに」という意味が込められている。米や餅、松の実をあげる家もあり、家々で違

う。そして11月16日には、田の神が山の神に戻るといわれ、朝暗いうちに起き出して餅をつき、あんこ餅にして同じように升に上げ供える。



田の仕事に関しては、他にいくつも行事があった。正月の11日には「農はじめ」(田の仕事はじめ)が行われる。大沢地区では、10日の夜中12時から「肥え」を背負って田んぼに運んで撒いたという。運ぶときに、ほら貝が吹かれ、その音がすると、他の家に遅れないように競って運んだという。搗いていた餅を夕方にまるめておいて、帰ってきてから皆で食べる。また、小正月には、豆がらや稲藁を苗に見立てて、雪の上で田植えのまねをし、作柄を占った「雪中田植え」という行事もあった。

ひな お雛様のごつつお

桃の節句の3月3日にもお膳が供えられる。旧暦にあわせ、月遅れの4月3に行なうことが多いようだ。

前日の宵節句には、餅と大根汁、大根おろし、お神酒があげられる。

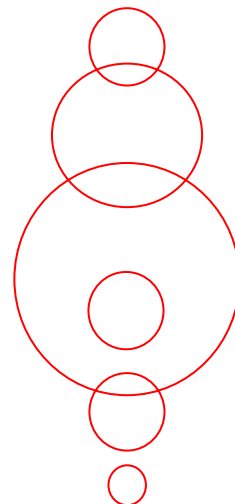


本節句には、家々によって多少違うが、焼いた「かど」(ニシン、春告魚)の尾頭付き、ごはん、青漬けのみそ汁、卵とじ、梅漬け、お神酒などが供えられる。かどは、生のままで供える家もある。桃の節句なので、桃の花を徳利に挿してお膳に飾る。家族もお供えと同じものを食べて、直会をする。また、お雛見とって、子ども達が家々を回って、その家のごちそうを食べて歩く習慣があった。

お菓子として、くじら餅、しんこ餅(草餅や紅で色をさした餡入の白餅)も作られる。しんこ餅は平らにしないで、丸く盛り上げ、饅頭型に形を整える。くじら餅もしんこ餅も、昔はくず米を利用して作った。



お正月の餅も、一番良い餅米で作った白い餅は他所へやり、次の普通の米で搗いたものを家で食べ、くだけ米で作った「くだけ餅」には塩餡を入れて食べたものである。



今回のごっつお

雛祭りをテーマにいろいろなごっつおが振舞われた。以下は、当日、並べられた料理のメニューである。

・巻き寿司（地元の米を酢めしにして、紅ショウガ、かんぴょう、キュウリ、錦糸玉子の具入り、カラシ菜の巻き寿司）・焼き魚（かど）・舞茸ご飯（精進風）・厚焼き玉子（地元産卵に砂糖・塩で味付けして、8回ほど巻きながら焼きあげたもの）・大根の三杯酢（大根、ニンジン、豆の三色の酢の物）・麩の煮物（麩、ワラビ、フキ、ニンジンの甘辛煮）



・栗の揚げ物（栗の渋皮煮をぎょうざの皮に包んで揚げたもの）・カラシ菜炒り・豆炒り・ゴボウ炒り・ウルのサラダ・汁物・漬物各種（やたら漬、青菜漬、カブ漬、沢庵漬等）・デザート（ぼた餅、しんこ餅、さくら餅、菜の花の蒸しパン、果物のクリーム和え、ワインゼリー、パバロア、チョコレートムース、フルーツポンチ、あられこ等） など

平岡の食べ事会の終わりに

会食後、柿崎氏に山の神にちなんだ昔話を披露していただいた。また、会場となった松沢家の90歳のおばあさんの手づくりの御殿鞠が、雛祭りのお土産として参加者に配られた。

最後に、1年間の食べ事会を振り返りながら、次の取り組みへの思いを新たにして、閉会となった。



山の神の昔話（柿崎宥存氏）

昔、太郎と次郎というマタギの兄弟がいったど。羽黒山の麓の西と東にそれぞれ小屋を建てて住んでいったど。冬のある大吹き（吹雪）の日、その日まだ外さも出らんねがったど。「これは休むほかねえな」と、小屋の中で火をボンボンと焚いてあだってだど。そしたらな、夜なって、太郎の小屋の外でだれがのか細い声がしたなだど。誰来たなだべど思って出でみたら、女の人のいったど。髪は腰の方までたらし、木の皮だが、獣の皮だがわがねえ着物きた、きれいな女の人だったど。見れば、お腹が大きくなって、今にもおぼご生^なし（お産）するような女の人だっけど。太郎は「まずまず吹きの中で大変だがら」と、小屋の中に入れだど。そしたら、女の人が、「わたしは、この近くに住んでるおなごだげども、道の途中で急に産気づいだがら、ここで生^なさせてください。この小屋を貸してください。」と頼むなだっけど。それを聞いた太郎は、びっくりしてしまっただど。昔からまたぎや山仕事する人は、おなごのお産を忌みきらって、絶対立ち会って駄目だごとになってだがらな。女の方は涙流して頼んだがったども、「それは駄目だ。あっちゃ行ってける」と、ぼったくって（追い出して）しまっただど。女の方は、悲しそうな顔して立ち去ったど。

それがらな、少したって次郎の小屋さも女の人が訪ねて来たど。そして同じように頼んだっけど。次郎っていう人は、憐れみのある人だったもんで、「よしよし」と言ってなあ、「俺の小屋の隅っこを貸すからそこで生^なせ」って、藁をしいでやっただど。女の人が、「産む間に外に出てける」って言うもんだがらなあ、次郎は大吹きの中、外に出て待っておったど。しばらくずっと、中から「おぎゃあ、おぎゃあ」と元気のいい赤ん坊の泣き声が聞けきたど。「おかげさまで、子ども生^なすごとでぎだから、中さ入ってください」と女の人に言われで、小屋の中さ入ってみたら、なんと12人ものまるまるした子を産んでだっけど。女の方は「月々の守り神になる子どもを^な生^なすことができました。私は、ここの山の神です。」と言ったっけど。そしてお礼に、山のものは、山菜でも獣でもいぐらでもとっていいども、子連れのは捕んなよって言ったっけど。そしてなあ、12人の子どもを軽々と背中さ背負ったり、前さ抱いだりしてたちまち遠くさ消えて行ったっけど。

これは不思議な事だと、次郎はどんどど（急いで）兄の太郎の小屋さ走っていったど。太郎の小屋さ行って中さ入ってみだせば、誰もいねっけど。「あに、あに」と叫んだがったども、誰も出でこね。ふっと見たでは、小屋の隅っこさ、こそこそと動くものいだっけど。そしたら、ちちゃこいネズミっこが1匹、顔こ出して次郎どご見たっけど、ほしてすぐまだ隠れでいねぐなってしまうたっけど。

山の神にお願いされだなさ、その願い叶えてやらねがったがら、結局、太郎はネズミにされでしまったなあど。なんぼ守らねんね事あっても、人が人を思う情っていうものが一番大事だっていう事だべがなや……

……どんぺんからんこねっけど

付 録

真室川「食べ物ごよみ」

●～おかあさんたちに聞いた、真室川の宝物～●

真室川の食文化は、地域で自給できるものを基本として形成されてきました。真室川にどれくらい食材があるのか。それを知ることが、地域の食文化を知ることが地域の食文化を知る第一歩だと、私たちは考えました。この「食べ物ごよみ」は真室川の16人のお母さんたちに答えてもらった調査用紙をもとに作ったものです。おおよその目安ですが、とれる時期も教えていただきました。

野菜(果菜)	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
1 イチゴ						■	■					
2 ナス						■	■	■	■	■		
3 トマト							■	■	■	■	■	
4 ミニトマト							■	■	■	■	■	
5 ピーマン							■	■	■	■	■	
6 シシトウ							■	■	■	■	■	
7 トウガラシ							■	■	■	■	■	
8 オクラ							■	■	■	■	■	
9 キュウリ						■	■	■	■	■	■	
10 カボチャ							■	■	■	■	■	
11 ズッキーニ							■	■	■	■	■	
12 スイカ							■	■	■	■	■	
13 メロン							■	■	■	■	■	
14 カタウリ							■	■	■	■	■	
15 シマウリ							■	■	■	■	■	
16 ゴーヤ							■	■	■	■	■	
17 ハヤトウリ							■	■	■	■	■	
18 トウモロコシ							■	■	■	■	■	
野菜(根菜)	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
1 ジャガイモ							■	■				
2 サトイモ							■	■	■	■	■	
3 カラトリイモ							■	■	■	■	■	
4 サツマイモ							■	■	■	■	■	
5 ナガイモ							■	■	■	■	■	
6 ハツカダイコン					■	■	■	■	■	■	■	
7 ダイコン					■	■	■	■	■	■	■	
8 地カブ							■	■	■	■	■	
9 色つけカブ							■	■	■	■	■	
10 聖護院カブ							■	■	■	■	■	
11 丸カブ							■	■	■	■	■	
12 赤カブ							■	■	■	■	■	
13 ニンジン							■	■	■	■	■	
14 ゴボウ							■	■	■	■	■	
15 コンニャク							■	■	■	■	■	
16 ショウガ							■	■	■	■	■	
17 ヤーコン							■	■	■	■	■	
18 チョロギ							■	■	■	■	■	
19 レンコン							■	■	■	■	■	
野菜(茎・葉・花)	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
1 アスパラガス	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
2 シソ						■	■	■	■	■	■	■
3 モロヘイヤ						■	■	■	■	■	■	■
4 ツルムラサキ						■	■	■	■	■	■	■
5 フダンソウ						■	■	■	■	■	■	■
6 パセリ	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
7 キャベツ						■	■	■	■	■	■	■
8 セロリ						■	■	■	■	■	■	■
9 ハクサイ						■	■	■	■	■	■	■
10 芽キャベツ						■	■	■	■	■	■	■

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
11 タアサイ										■	■	■
12 ノザワナ										■	■	■
13 タカナ										■	■	■
14 セイサイ										■	■	■
15 ユキナ	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
16 チンゲンサイ	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
17 ホウレンソウ	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
18 コマツナ	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
19 シュンギク	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
20 ミズナ	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
21 ツボミナ		■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
22 チヂミナ		■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
23 アブラナ		■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
24 ブロccoli							■	■	■	■	■	■
25 カリフラワー							■	■	■	■	■	■
26 キク							■	■	■	■	■	■
27 ミヨウガ							■	■	■	■	■	■
28 レタス							■	■	■	■	■	■
29 サラダナ							■	■	■	■	■	■
30 サニーレタス							■	■	■	■	■	■
31 ネギ	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
32 葉ネギ							■	■	■	■	■	■
33 ニラ							■	■	■	■	■	■
34 ワケギ							■	■	■	■	■	■
35 ニンニク							■	■	■	■	■	■
36 タマネギ							■	■	■	■	■	■
37 ラッキョウ							■	■	■	■	■	■
豆類	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
1 インゲン							■	■	■	■	■	■
2 ササギマメ							■	■	■	■	■	■
3 サヤエンドウ							■	■	■	■	■	■
4 グリーンピース							■	■	■	■	■	■
5 ソラマメ							■	■	■	■	■	■
6 エダマメ							■	■	■	■	■	■
7 小豆							■	■	■	■	■	■
8 大豆							■	■	■	■	■	■
9 黒豆							■	■	■	■	■	■
穀類	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
1 うるち米										■	■	■
2 もち米										■	■	■
3 ソバ										■	■	■
4 ハトムギ										■	■	■
山菜	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
1 セリ	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
2 タラノメ	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
3 ミツバ	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
4 フキノトウ	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
5 ウド	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
6 ウルイ	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■

●180種類以上の食材を自給していました。●

その結果として、田畑の作物87種、山菜32種、川の食材17種、獣類9種、きのこ25種、果樹・木の実17種が確認できました。16人のおかあさんたちだけでも、180を超える食材を自給していることが分かりました。特に目を引くのは、山の恵みです。春には山菜、夏には川魚、秋にはきのこ・・・。豊かな自然がごちそうを次々ともたらしてくれます。

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
7 コシアブラ		■	■	■	■							
8 ツクシ			■	■								
9 カタクリ			■	■								
10 キノメ(アケビ)			■	■	■							
11 アイコ			■	■	■							
12 シドケ			■	■	■							
13 コゴミ			■	■	■							
14 ゼンマイ			■	■	■							
15 アザミ			■	■	■							
16 ヤマニンジン			■	■	■							
17 ヒロコ			■	■	■							
18 ギョウジャニンニク			■	■	■							
19 ワサビ			■	■	■							
20 ホンナ			■	■	■							
21 ハリギリ				■	■	■						
22 シオデ				■	■	■						
23 ヨモギ				■	■	■						
24 フキ				■	■	■						
25 ワラビ				■	■	■						
26 サンショウ				■	■	■	■	■	■			
27 ミズ				■	■	■	■	■	■	■		
28 ササダケ			■	■	■							
29 モウソウチク				■	■							
30 ネマガリダケ				■	■							
31 ジュンサイ					■	■						
32 ユリ根										■	■	
川の食材	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
1 コイ	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
2 フナ	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
3 ウグイ		■	■	■	■							
4 イワナ		■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
5 ヤマメ		■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
6 ヤツメウナギ				■	■	■						
7 サクラマス			■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
8 ドジョウ				■	■	■	■	■	■	■	■	■
9 サワガニ				■	■	■	■	■	■	■	■	■
10 ナマズ				■	■	■	■	■	■	■	■	■
11 ツブ(オオタニシ)					■	■	■	■	■	■	■	■
12 ウナギ						■	■	■	■	■	■	■
13 アユ							■	■	■	■	■	■
14 カジカ	■			■	■	■	■	■	■	■	■	■
15 サケ								■	■	■	■	■
16 モクズガニ								■	■	■	■	■
17 ヌマエビ					■	■	■	■	■	■	■	■
獣類	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
1 ニワトリ	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
2 ウサギ	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
3 アイガモ	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
4 カモ	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
5 キジ		■	■								■	■
6 ヤマドリ		■	■								■	■
7 ノウサギ		■	■								■	■
8 ツキノワグマ		■	■								■	■
9 マムシ						■	■	■	■	■		
きのこ	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
1 シイタケ				■	■					■	■	■
2 トビタケ								■	■	■	■	■
3 マイタケ									■	■	■	■
4 キクラゲ										■	■	■
5 マスタケ										■	■	■
6 ブナハリタケ										■	■	■
7 ヤマブシタケ										■	■	■
8 ホウキタケ										■	■	■
9 ウスタケ										■	■	■
10 アブラシメジ										■	■	■
11 フウセンタケ										■	■	■
12 ナラタケ										■	■	■
13 ホンシメジ										■	■	■
14 ムキタケ										■	■	■
15 ヒラタケ										■	■	■
16 ブナシメジ										■	■	■
17 スギカノカ										■	■	■
18 ハタケシメジ										■	■	■
19 エノキタケ										■	■	■
20 クリタケ										■	■	■
21 サウモダシ										■	■	■
22 スキウチタケ										■	■	■
23 ナラタケモドキ										■	■	■
24 ナメコ										■	■	■
25 スギタケ										■	■	■
果樹・木の実	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
1 クワの実						■	■					
2 モミジイチゴ						■	■					
3 マタタビ						■	■					
4 グミ						■	■					
5 ヤマグワ							■					
6 モモ								■	■			
7 スモモ								■	■			
8 イチジク								■	■			
9 アケビ									■	■		
10 サルナシ									■	■		
11 カキ										■	■	
12 ヤマブドウ										■	■	
13 クルミ										■	■	
14 クリ										■	■	
15 リンゴ										■	■	
16 ラ・フランス											■	■
17 ギンナン											■	■

おわりに

真室川「神様のごっつお」に想う
～平成18年度の「食べ事会」～

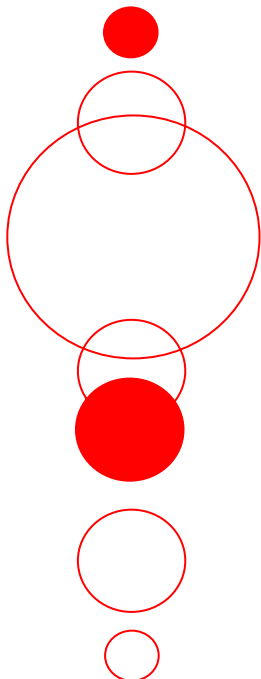
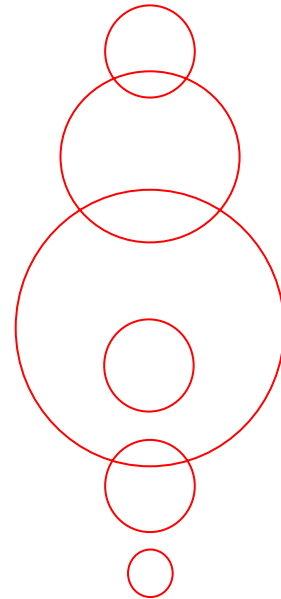
真室川 神様の
ごっつお

「真室川の神様とごっつお」。神様を通して見つめる地域の食文化。それが18年度のテーマでした。真室川に限らず、神々に食物を供えるという風習は、全国各地に、そして世界各国にも存在しています。神様へのお供えは、それぞれの地域、各家庭のごちそうであり、地域の気候風土・食文化が色濃く反映されたものでした。

また、「神様のごっつお」は、神様と楽しむ人々のごっつおでもあり、その膳の中には、独特の思想や信仰、願い、思い、そして長年積み上げられた食に関する知恵が凝縮されていました。

食文化と精神文化の融合でもある「神様のごっつお」を辿ったこの1年、ほんの一部の地域で行なった「食べ事会」だったにも関わらず、こんなにも多彩な内容を聞き取りすることができ、多様な「神様のごっつお」に出会うことができました。

そしてまた、地域の豊かさに気づき、実感できた一年でした。



平成19年3月 発行

真室川 食の楽校

真室川 神様の ごつお

～ハレの日 もてなしの形さがし～



真室川 食の楽校